特集

「確かな学力」育成プロジェクト

令和４年度からスタートした「確かな学力」育成プロジェクトは、これからの社会を担っていく小・中学生が基礎的・基本的な知識を確実に身につけ、課題を解決するために必要な思考力・判断力などを伸ばすことや、主体的に学習に取り組む態度を養うことで、子どもたちの「確かな学力」の定着・向上を図ることを目的としています。

木のように根幹をしっかりつくる常陸大宮市の教育方針

目的達成のため、基礎的な部分として大切なのは、「関心・意欲・態度」で、その上で、思考力や知識などが確かなものとして身についていくという考えのもと、市では様々な取組を進めています。

この考え方の構造を「学力の樹」として表すと、図のように、「関心・意欲・態度」が根の部分、「思考力・判断力・表現力等」が幹の部分、「知識・技能」が葉の部分として例えられます。市では、「学力の樹」を構成する各部をデータ化し、子どもたち一人ひとりに合った指導を行うために「関心・意欲・態度」を測る「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート（hyper-QU）」、「思考力・判断力・表現力等」を測る「認知能力テスト（NINO）」、「知識・技能」を測る「標準学力検査（NRT・CRT）」を行っています。これらのアンケートやテストを同時に導入しているのは、県内でも常陸大宮市が初めてです。

図　学力の構造を木で表した「学力の樹」イメージ
（引用：志水宏吉著「学力を育てる」（岩波新書 2005 年））

常陸大宮市の取り組み①

子どもたちの学校生活への思いや能力・学習到達度を「データ化」

学校生活への思いをアンケートでデータ化し指導に生かす

「確かな学力」の育成の基盤となる親和的な学級づくりのために、常陸大宮市では、「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート（hyper-QU）」を行っています。hyper-QUでは、友人関係、先生との関係、学級との関係、学習意欲などの質問項目があり、それらの回答結果により、学校生活を楽しいと思い、自分の居場所があると感じている「学級生活満足群」や自分の思いや存在が周囲に認められていないと感じている「非承認群」などに分類されます。学校生活に関して子どもたちが感じている気持ちはデータ化しづらいものですが、アンケートを行うことで、子どもたちの内面が捉えやすくなり、いままでよりもさらに先生が子どもたち一人ひとりに合わせた声かけや目配りができるようになりました。

学校生活に満足する子どもたちが２年間で５％増加

データをもとにした先生方の関わり方は、徐々に結果として現れており、下の表のとおり、「確かな学力」育成プロジェクト開始の令和４年度前期と比較し、「学級生活満足群」と判定された子どもたちの割合は令和５年度後期では、５％以上増えており、目標としている「親和的な学級づくり」が少しずつ実現しています。

令和４年度　前期	61.4%
令和４年度　後期	64.2%
令和５年度　前期	65.6%
令和５年度　後期	67.6%

表　「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート（hyper-QU）」で「学級生活満足群」と判定された常陸大宮市内の児童・生徒の割合

学習到達度だけでなく子どもたちの能力もテストでデータ化

また、学習面でも子どもたちの状況を可視化させ、一人ひとりに合ったサポートができるような取組を行っています。新しい学年が始まったタイミングでは、前学年で学習したことがどれだけ身についており、日本全国で比較した時にどの位置にいるかを測る「標準学力検査テスト（NRT）」と、思考力や判断力を測る「認知能力テスト（NINO）」を行い、認知能力相応の学力が身についているかをデータ化・分析し、新年度の指導に活用しています。例えば、NRTで、昨年度までに学習した内容の理解度が認知能力と比べて低い子どもに対しては、具体的に何をどのように頑張ればよいかを話したり、逆に、NINOで測られた認知能力以上の結果をNRTで出している子どもに対しては、すでに、予測以上の頑張りをしている可能性が高いため、「頑張ろう」という声かけではなく、良い結果を継続できるようなサポートを行うなど、一人ひとりに合わせた学習指導をすることができます。

年度末にも学習到達度を測り、今後の学校全体の指導に役立てる

さらに、年度末には、１年間の基礎的・基本的な学習内容の到達度を把握する「標準学力検査テスト（CRT）」を行い、１年間の学習の成果がどのように出ているかをデータ化します。これにより、子どもたちの学び直しや先生方の教え直し、子どもたちへのアプローチを見つめ直し、今後の学校全体の教育方針をより良いものへと改善させていくことができます。

常陸大宮市の取り組み②

タブレットなどの一人一台端末を有効活用した授業

令和２年度に日本全国で始まった、子どもたちがタブレットなどを活用して学習できる環境を整える「GIGAスクール構想」に合わせ、常陸大宮市では令和３年度から、各学校へのタブレット端末の導入を本格的にスタートしました。導入４年目を迎え、各学校では、情報機器を有効活用した教育が定着してきています。

タブレットからの書き込みで瞬時に考えを共有

授業で意見を共有するときの手法として、これまでは、模造紙などに個人の意見を書いた付せんを貼り付けて一覧化する、手を挙げて口頭で発表するなどの方法が採られてきました。情報機器を導入してからは、下の図のようにホワイトボードアプリを使った意見交換ができるようになりました。ホワイトボードアプリを活用することのメリットとしては、子どもたちがタブレットで入力した内容が電子黒板に瞬時に反映されるため意見が一覧化しやすい、手を挙げての発表よりも意見を出すハードルが低くなるなどがあります。ホワイトボードアプリは、５教科の授業だけでなく、総合や道徳、クラスで決め事を行うときなど、幅広い場面で使われています。

動画や動かせる画像で想像が必要な内容も理解しやすく

情報機器の導入により、先生と子どもたちが動かせる図形などの画像や、解説動画を共有できるようになりました。これにより、算数・数学の空間問題で実際に図形を動かしてみたり、理科の天体の授業では星を動かしてみたりと、空間や動きを捉えやすくなり、これまでより内容の理解を深めることができるなりました。また、自宅でも小学校１年生から中学校３年生までの学習内容の講義動画を見ることができ、前に学んだ内容の振り返りから先の学年の予習まで、理解度や自分のペースに合わせて学ぶことができます。

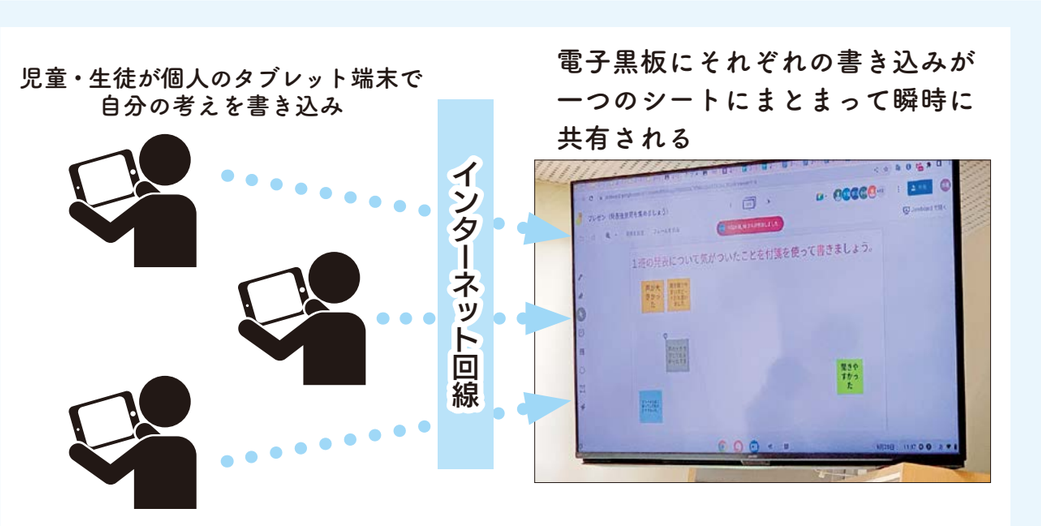


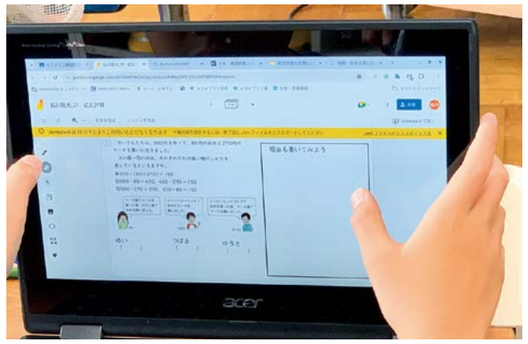
図　児童・生徒のタブレットと電子黒板を利用しホワイトボードアプリでの意見共有イメージ

授業ではこんな風に情報機器が活用されています！

国語

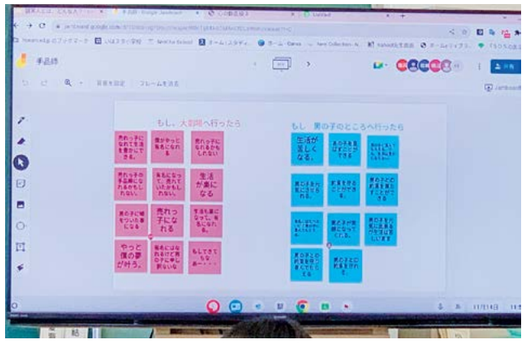
▲小学校１年生の国語の「じどう車ずかんをつくろう」という単元で先生が作った共有シートから興味のある車を選んで自動車の説明文を作る様子。

算数・数学



▲問題に対する答えだけでなく、その答えに至った理由も書くように作られた問題シート。解答はホワイトボードアプリで共有するため、他の人の考えを学ぶことができます。

道徳



▲主人公の心の葛藤を子どもたちが自分事として捉え、ホワイトボードアプリを使って考えを出し合う様子。

家庭科

▲裁縫の授業で、タブレットで手順の動画を見ながら、作業を進める様子。動画を交えることでわからないところを何度も見返したり、得意な子どもが自主的に先に進むことができます。

＼令和６年度の新たな取組！／

授業中の子どもたちと先生の様子をデータ化

令和６年度の新たな取組として、授業診断ツールを使い、子どもたちの発話数や挙手数、視線の低下などが授業中にどのように移り変わっているかや、先生が子どもたちの席を回って指導する時の動きのデータ化を始めます。今年度は、大宮中学校をモデル校として、10回の授業で実施予定です。集めたデータは、指導内容の改善や、若手の先生方への指導技術の引き継ぎに活用し、子どもたちがこれまで以上に授業を理解できるよう、指導者の技術向上を図ります。